

## 24. 北海道医療大学歯学部保存科において研修医が行った 歯内治療の成績について

○塚越 慎, 川上 智史, 原口 克博,  
尾立 達治, 荆木 裕司, 高橋 美晴,  
矢吹 恵美, 藤井 博志, 島袋 智広,  
松田 浩一

(北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座)

臨床研修医がスタートして2年が経過したが, これまでの臨床研修医の研修カリキュラムを基礎として完全義務化に向けその改善を目的として, 今回, 臨床研修医が行った歯内治療の成績について調査を行った。

【材料と方法】臨床研修医4名が行った歯内治療症例に18項目について調査を行い臨床研修医, 指導医が考察を行った。

【結果】抜髄症例91歯, 感染根管症例62歯であり, 平均年齢は, 抜髄症例で30.6歳, 感染根管症例で34.0歳であった。治療回数は, 抜髄症例で平均4.1回, 治療期間の平均が32.2日, 感染根管症例では平均5.3回, 治療期間の平均が35.6日であった。抜髄症例の治療回数4回以下のは66症例, 5回以上のは25症例であった。感染根管症例の治療回数5回以下のは40症例, 6回以上のも

のは22症例であった。診断名では, 抜髄症例で慢性潰瘍性歯髄炎が多く, 感染根管症例で慢性根尖性歯周炎が多かった。

【考察】抜髄症例, 感染根管症例の患者の平均年齢がそれぞれ30.6歳, 34.0歳と低年齢である。これは全学の学生の歯科診療に対するシステムの中で臨床研修医に担当を行ったためだと思われる。治療回数が抜髄症例で4.1回, 感染根管症例で5.3回と, 両者に1.2回の差しかみられなかったのは術者が臨床研修医であり技術的未熟さによると思われる。抜髄症例で治療回数5回以上, 感染根管症例6回以上のは術者位, 患者位など臨床経験の不足, 根管形態など治療難易度により治療回数が多くなったと思われる。

## 25. スナネズミ p53遺伝子の単離と酵母を用いたその機能的変異検出法の確立

○青山 哲也, 小林 徳栄, 中田 大地,  
永易 裕樹, 河野 峰, 柴田 敏之,  
有末 眞

(北海道医療大学歯学部口腔外科学第二講座)

近年, 発癌と炎症との関連が注目されている。その中でスナネズミは, H pylori感染させることにより胃炎, 胃癌生じる動物実験モデルとして知られている。そこで, 今回この炎症による発癌機序を解明するためにスナネズミ p53機能異常を検出する酵母アッセイ法の開発を目的として実験を行った。

【方法・結果】p53の種間保存領域にプライマーを設定し, 肝由来RNAを用いてRT-PCR法により, DNA結合領域を含む約900bpを単離した。これを元にしてRACE法を行い1173bpからなるスナネズミ p53のcDNA全長配列を決定した。一方, 酵母内ヒト p53発現ベクター-pLS76の野生型 p53のcDNA部分をHindIIIとEagIで完全消化して削除し, これにスナネズミ p53のcDNAをT4リカーゼにより組込みスナネズミ p53発現ベクターを作製し

た。このスナネズミ p53発現ベクターのスナネズミ p53 cDNAの塩基配列を調べたところコーティング領域の塩基配列は全て野生型のそれと一致した。このスナネズミ p53cDNAのDNA結合ドメインを中心とするギャップを入れたベクターを検体由来のp53RT-PCR産物とともに酵母yIG397に導入し相同組換えをおこさせた。本法ではp53蛋白がレポーター遺伝子ADE2の転写をon/offすることにより酵母コロニーの色が赤(変異型)または白(野生型)となる。変異型と野生型p53を種々の比率で混ぜ合わせ本アッセイを行った所, 赤コロニー比率と変異型 p53の比率との間に定量的直線関係が得られた。また, 7週齢のスナネズミの種々の正常組織由来のPCR産物について酵母アッセイを行ったところ, 約2.2~10%の赤コロニーが出現した。この値は, ヒトやラットのハックク